慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	奈良絵本・絵巻の諸問題
Sub Title	The problems of "Nara-ehon"
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2006
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.91, No.1 (2006. 12) ,p.110- 124
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関場武教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00910001-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奈良絵本・絵巻の諸問題

石川　透

一、はじめに

慶應義塾大学国文学研究会は、毎回、私が広報等を担当しているのですけれども、今回は本格的な宣伝をしておりません。本当でしたら、北館ホールが取りたかったのですが、取れませんでしたので、この北館四階会議室になりました。ここは百人も入れないような部屋でございますので、あまり積極的に宣伝ができませんでした。そんな中お越し下さいまして、ありがとうございます。

私の講演は、「奈良絵本・絵巻の諸問題」という、非常に大雑把な題にさせていただきました。原典研究や文献研究がもたらすものというところで、本当は色々お話をしたいのですが、既にお聞きになっている方もいらっしゃるかもしれませんし、重なる部分もあるかもしれません。ですから、今、奈良絵本・絵巻の研究が、こういう段階に来たということを、お話しさせて頂きます。

私の場合は、奈良絵本、または絵巻等を取り扱っております。普段はもちろん、現物を扱っておりまして、この場に

色々な本物を持ってくるということも出来るとは思います。しかし、本物を持ってくるというのは止めた方がいいという意見もございますし、色々な所に行きますと、奈良絵本や絵巻は、触れる、あるいは閲覧することすら出来ないこともございますので、最近はパソコンの画面上で説明することが多いのです。今からお話しするのは、画面中心になりますが、それとは別にレジュメを用意しました。小さすぎて読めない、あるいは何回もコピーしているので読めないということもあるかと思いますが、一応ご参照いただければと思います。今回は、去年の奈良絵本・絵巻国際会議の時に、産経新聞が取り上げてくださったものを貼りました。

実は、今週の火曜日、変な話題で申し訳ありませんが、「なんでも鑑定団」という番組がありまして、そこに奈良絵本が出ております。奈良県の方が、奈良絵本を値踏みしてもらっていたのです。それは『文正草子』という横型の奈良絵本で、一番よくあるタイプのものですので、奈良絵本としてはあまり値がするものではありません。私は値段について文句があるわけではないですが、テレビという場でありますので、少なくとも正確な情報を流して欲しかったのです。

ところが、ご覧になった方はわかるかと思うのですけど、その鑑定をした方は、美術の方といいますか、販売の方なのですが、その方の説明では、奈良絵本というのは、江戸の中頃にかけて、奈良の興福寺周辺で作られた、という話をしていたのです。私は色々なところで、それはかつての辞典類には出ていたけれども、嘘だということを言い、去年の奈良で開催された奈良絵本・絵巻国際会議の時にも、奈良絵本の名前の由来について話しました。また、それは、色々なところに書いてありますので、まさかそんな言葉が出るとは思わなかったのですけれども、現状ではやはり、奈良絵本というと、どうしても奈良で作られたという話になってしまうということです。実際に今の研究段階では、研究者として、そう言う人はほとんどいないと思います。

二、奈良絵という言葉

基本的には、江戸時代のおそらく後期から明治時代にかけて、奈良絵というものが非常に流行りました。奈良絵というのは、これはワンパターンの絵でして、今でも、奈良市内の色々なお土産の店で売っております。例えば、扇子や、陶器の周りに絵が描いてあるものです。二人の人間が並んでいて、またそれを別の人間が家から覗いている、という様子が描かれています。このパターンがいわゆる奈良絵です。このように、扇子や陶器、それ以外では、今ならハンカチの類にも描かれています。これを奈良絵と言う時代が、一般的には明治からといわれているのですけれども、この絵自体は江戸時代からあります。ですから私は、奈良絵という言葉自体も、江戸の後期にはあったのではないか、ということを最近書きましたが、江戸時代の後期から明治にかけて、少なくとも明治時代の後期には、この絵のものを奈良絵と呼んでいました。その描かれる対象が、扇であろうが、団扇であろうが、陶器であろうが、ハンカチであろうが、この絵のものが奈良絵と呼ばれているのです。

その伝統があって、この絵の雰囲気と、今われわれが研究している奈良絵本の雰囲気とが、とても似ているので、それらが奈良絵本と呼ばれるようになったと、私は考えているわけです。奈良絵というものには、似たものが一つありまして、これは皆さんご存知かもしれませんが、滋賀県大津に大津絵というのがあります。大津絵も、基本的には似たようなものですが、弁慶や義経という、画題が何種類かあります。この大津絵などと同じように奈良絵と呼ぶ習慣があり、その奈良絵に似ているため、奈良絵本と呼ばれるようになったと考えております。

奈良と関係があることはあるのですが、我々のいう奈良絵本が作られたのは奈良ではなく、おそらく京都周辺です。

それが残念ながら、古い辞典類を見ると、奈良周辺で作られたと出てくるわけです。それがテレビに出てしまいました。もちろん、専門家が出ていても、あてにならないというのがテレビです。そういうことがあったものですから、それを思い起こすような形で、せっかく新聞に載るような国際会議を奈良でやったのに、という意味も込めて、ちょっと話をいたしました。

レジュメの方に戻りますと、内容の説明は、ちょっと字が小さくて申し訳ないですが、こちらはお時間があるときにお読みいただければと思います。現在、奈良絵本が少しずつですが、認識されるようになったということです。これは共同通信発信の最新のニュースですので、色々なところが取り上げてくださったものです。現在は、こういう研究段階にあるということです。

三、奈良絵本・絵巻研究の現在

奈良絵本・絵巻の実際のものを、日本各地、世界各地で調べると、色々なことがわかってきます。その中には、全くわかっていなかったことですけれども、浅井了意の書いた奈良絵本や絵巻も存在します。これは非常に面白いことで、浅井了意という人は、国文学を研究している人ならおわかりだと思いますけれども、仮名草子最大の作家、いわゆる創作家です。江戸時代前期の小説家が、どういう過程を経て創作家になったのかということはわかっていなかったのです。それが様々な筆跡の研究、色々な資料が発掘されることによって、おそらく若い頃に書家として本を写していて、それを土台にして創作家になっていったことがわかるということです。

これは絵巻物の例ですけれども、字があり、なおかつその後に絵があるという、いわゆる絵巻物のパターンです。日

本最古の絵巻、源氏物語絵巻からその形は変わっておりません。ですからその絵巻物の形を踏襲しています。こういう絵巻物や、それ以外にいわゆる冊子の形のもの、奈良絵本があるのです。奈良絵本は、ちょっとかわいらしい絵と、文字が交互にあり、これは絵の裏が見える非常に貴重な資料で、絵の裏に字が書いてものもある。このような絵本と絵巻が同時期に、大量に作られている。

その作り手の一人、その字の部分を担当した人として、浅井了意がいるということがわかったのです。そうしますと、浅井了意という大作家が、若い頃に、こういう字を書くことを仕事としている。そうすると、おそらくは、字を書くということは非常に重要なことで、単純に読む行為よりは、頭に記憶として残ります。それがどんどん身についていきます。浅井了意はもともと大変読書家であったと思いますし、知識もあったと思いますが、こういった本文執筆という、字を書くという仕事をしているうちに、ますます力がつき、やがて作家になったというように考えられるのです。そういうことがわかっています。この説を、五年前に私が発表した時には、疑った研究者もいたのですが、五年経って、さまざまな資料が補われたことによって、おそらくこの説を疑われている方は、専門家にはいないと思います。

字の方の鑑定はかなり進んでいるのですが、絵の方の鑑定は難しいものです。絵の方はかなり意見が分かれます。字の方は、例えば松尾芭蕉のように、非常に有名人である場合は、偽物を作る可能性があります。以前、奥の細道の自筆本が、十年ほど前に出てきたのですけれども、最初の頃は疑われました。今でも疑っている方はいますが、私はもう大丈夫だと思っています。

ただ、松尾芭蕉と違い、浅井了意の筆跡というのは、これまでよくわかっていなかったのです。特に、真筆のものとなると、存在すら知られていなかったのです。それくらいですから、その筆跡を真似る人間はいなかったはずです。ま

た、偶然全ての字において似るということは、ほとんどありえません。ということで、かなりの確率でその人だという断定が出来ます。ですから、浅井了意は、ほぼ間違いなく、若い頃にこういう奈良絵本・絵巻を書いていたということです。そういう成果が、ここ数年でどんどん出てきました。

四、ボストン美術館蔵絵巻

今日は、それからどのように研究が発展していくのか、あるいは、やり方は同じですので、これまでの処理の仕方で奈良絵本や絵巻を分類すると、さまざまなことが見えてくるということをお話しします。

資料にあるのは、『むろまち』第一〇号に掲載した、三月の中程に調べてすぐに書いた、最新の情報です。そこに書きましたが、ボストン美術館が、意外にも、いえ当たり前かも知れませんが、大量に珍しいものを所蔵しています。それがほとんど百年間ほど、誰も見ることがなく保存されていました。

ボストン美術館の持っている日本美術品の宝物というのは、既に知られているものも多くあります。ご存知なのはおそらく、『吉備大臣入唐絵巻』あるいは『平治物語絵巻』でしょう。日本にあれば、間違いなく国宝に指定されているものがあるということで、それらの紹介は既に終っております。それから現在は、ボストン美術館所蔵の浮世絵の研究がかなり進んでおります。ここ十年くらいの間に進んだのですが、つい最近まで、神戸の市立博物館でボストン美術館の肉筆浮世絵の展示「江戸の誘惑」をやっておりまして、もう名古屋のボストン美術館で、その次の展示が始まっております。これから東京でも、やがて、江戸東京博物館で展示をされます。浮世絵も、百年ほどは、ほとんど誰も見たことがなかったものがあったということで、この十年くらいで知られるようになり、それがいま日本に里帰りしています。

それらとはさらにまた別に、絵巻のものもあったということです。その題名につきましては、『ボストン美術館日本美術調査図録・第2次調査』（二〇〇三年六月、講談社）という本にあります。特殊な本ですのであまり知られていないですが、この本の中に絵巻の書名は出ています。ただその中に、書名だけではわからないような情報が、本物を見ると出ているということがわかったものですから、報告をいたします。

五、『にんらん国絵巻』

まず、図録に掲載された書名を見ただけで、非常に気になっていたものが、『にんらん国絵巻』というものです。これは御伽草子を研究なさっている方でも、ほとんどご存じない題名で、つい最近明らかになった物語なのです。たまたま私が購入したものに『にんらん国　下』という奈良絵本がありまして、これはすごく珍しいということがわかり、私も既に紹介をいたしました（「新出奈良絵本『にんらん国』について―附解題・翻刻―」『古典資料研究』第八号、二〇〇三年一二月）。

この『にんらん国』と同じような作品が、松本隆信先生が編集なさった『増訂室町時代物語類現存本簡明目録』に入っております。東京大学の国文学研究室で持っています、奈良絵本の『しやうはう』という作品で、これが何だかよくわからないものとして、誰にも紹介されずに残っておりました。おそらくは東大にあるものですから、先生方にはご存知の方もおられたでしょうし、国文学研究資料館には写真もありますので、皆さんどこかで見ているわけですけれども、内容はよくわからないままになっておりました。その内容を、たまたま私が紹介していたわけです（「東京大学国文学研究室蔵『しやうはう』の意義」『慶應義塾大学日吉紀要・人文科学』第一七号、二〇〇二年五月）。

題名は、『にんらん国』が一番良いわけではないのですが、『しやうはう』よりは良いかと思います。といいますのは、何故『しやうはう』という名前になったのかもわからないのです。一方、『にんらん国』は、物語の舞台となっているため、題名になってもおかしくありません。ですから、本来は『にんらん国』であったものが、何故か『しやうはう』という題名がどこかで付けられた、ということのようです。このように、題名もよくわからない、内容もよくわからないという作品であったわけです。

この話はまた、内容も奇想天外な物語です。ボストン美術館の絵巻は、『しやうはう』や『にんらん国』の話と、完全に一致するわけではないのですけれども、絵を見ることによってお話をいたします。

まず最初に、知られていた東京大学所蔵の『しやうはう』という作品から、見ていきたいと思います。奈良絵本ですが、東大の国文学研究室には、表紙のない薄型の奈良絵本群がありまして、みな縦型で、絵もちょっと簡単な感じがします。おそらくは、一七〇〇年前後に作られた奈良絵本です。この話は、舞台が日本ではありません。だいたい絵の中に、このようなタイル状の建物があったときは、日本ではなく、中国かインドです。あるいはまったく違う異国、化け物等が出てくる国にも、こういった建物が出てきます。

『しやうはう』というタイトルがどこから付けられたかというと、絵の裏にある文字です。題名が残っていれば良いのですが、表紙の題名というのは簡単に取れてしまいます。そういう場合、どういう題名を付けるか非常に難しいのですが、絵の裏に題名があった場合は、これを題名として採用します。明らかに「しやうはう」とありますので、『しやうはう』という題名が付けらました。ただこの言葉は、本文には出てこないのでおかしいのですが、いちおう目録には『しやうはう』として採用されました。

この物語のあらすじは、中国の王に子供がいるわけですが、后が早く死んでしまいます。この子は、帝の子だけれども、お母さんがいなくなってしまいます。この後で、いわゆる別のお母さんがやってきます。ということで、この話は継子物なのです。継子物ということで、お母さんのいないこの子供は虐められる、疎外されることになります。本来なら、お母さんがしっかりと生きていれば、この子は跡取りですから、後の帝になるはずなんです。ところが、新しいお母さんに男の子が誕生してしまいます。そうすると継母にとっては、自分の子供でない長男坊は、どうにかして片付けたいわけです。この場合はお寺に預けられるのですが、その後色々なことがあって流され、鬼の国に行き着きます。鬼の国に流され、最初は怖い目にあうわけですけれども、この子供は帝の子供ですから気品があります。やがては、この鬼の国の王様にも面会できるようになります。子供は鬼の国にいたわけですが、元々いた国とは別に大きな国が一つあり、それをにんらん国といいました。にんらん国の帝には、男の子がおらず、女の子がいました。

この話は複雑なのですが、この王子は、にんらん国に行くことになります。つまり、にんらん国の皇太子になるわけです。元々いた国では、次男が王位に着くわけです。ところが、鬼の国の大王が、元々いた国に対して怒りを覚えて、攻め寄せているところです。鬼に対して、虎がいて火を噴いて、戦っている様子がわかります。兄弟がそれぞれ別々の国の王子として活躍し、やがて帝になるわけですが、この二つの国が戦争するわけです。戦乱状態になってしまいます。

東大国文学研究室所蔵の『しやうはう』は、絵はほぼ揃っていると思いますが、肝心の最後の部分だけがなく、戦争をしているところで終ってしまいます。本文を見ますと、どういう終わり方をするかというと、中国が内乱状態になったので、日本から聖徳太子が来ます。ご存知のように、聖徳太子は中国に渡ったことはないと思いますが。聖徳太子がやって来て、実際は兄弟である二人の帝の、いわゆる調停をするわけです。仲直りをさせ、国を入れ替えたりして、め

でたしめでたしで終わるという物語なのです。

中国を舞台にして、鬼の国や、虎やいろんな動物は出てくる、戦争はする、最後には聖徳太子まで出てきてしまうという、たいへん奇想天外な話です。こういった内容の『しやうはう』という本がありまして、それに対して、私が手に入れた奈良絵本というのは、横型の奈良絵本の『にんらん国　下』というものです。東大の本とは、大分違うタイプの絵ですが、火を噴く虎が出ております。大雑把な内容は同じですが、本文は相当に違っています。御伽草子というのは本文が違う異本が相当ありますが、同じ系統の作品であることは間違いないものです。この二つの本の存在は、最近明らかになってきまして、なおかつ、ここにもう一つ、ボストン美術館の『にんらん国絵巻』というのが出てきたのです。

資料にも書きましたが、残念なことに、百年ほど前に日本からボストンに絵巻物が渡った時に、向こうの人は字の部分はいらないと考えたようでした。そのため、字、いわゆる詞書の部分を全て取ってしまい、絵だけが残っているという絵巻物なのです。題名は、もともとの表紙に『にんらん国』と出ておりますので、やはりこれが題名だったのでしょう。奈良絵本の『にんらん国　上』に、この絵巻の『にんらん国』が出てきましたので、題名は『にんらん国』と確定してよいでしょう。

ボストン美術館の絵巻は、たいへん豪華です。縦は三十三センチ、一尺ほどです。先ほど、東大の本と私の奈良絵本と二つを較べましたが、それよりもさらに豪華なものです。

絵は、流されて鬼の大王のところに、長男は行くわけですが、鬼の娘や奥さんなどの姿が見えます。こういう鬼の世界、異類婚姻譚の世界は面白くて、女性陣は鬼であるはずなのに、人間の姿で描かれているのです。鬼の娘であるはずなのに、ちらと角があるような感じで、あとはほとんど人間なのです。やはりここにも火を噴く虎がおり、さらに虎だ

けでなく、象、獅子、これらがみんな火を噴きます。これらの動物を飼っているのです。また、天上には雷が描かれています。こちらの絵巻物は、絵のみで本文はわかりませんが、最後に聖徳太子が出てきません。描かれているのはそこだけですから、剥ぎ取られてどこかに行ってしまった可能性もあります。ただ状態からいうと、元々の絵は全部揃っていると考えられます。

ご存知のように、絵巻というのはある程度は太さがありますので、詞書を取ってしまったら、細巻になってしまいます。ところが見たとおり、上巻だけで、ほぼ物語の終わりまで行ってしまったのです。絵だけを全て集めて、『にんらん国　上』という表紙を付けたわけです。そうすると、『にんらん国　下』という巻物があるのですが、いったい何なのでしょうか。こういう情報までは、図録には出てきません。

『にんらん国　下』という絵巻物を見ますと、その絵は明らかに日本の姿です。十二単を着ていますから、日本の宮廷か何かです。もちろん、これも詞書を取られてしまっているので、絵のみで判断するしかありません。『にんらん国』ではないことは明らかです。よく見ると、『鶴亀』『松竹』という二つの物語が合わさっていることがわかります。『松竹』という物語は、宮崎県の話ですが、二人は、本当は何百歳という老人なのですが、常に若い姿をしています。なぜかというと、家の近くの泉を飲んでいるからなのです。いわゆる養老の滝伝説です。これは懿徳天皇の時代の話ですから、懿徳天皇もその水を飲んで長生きをするわけです。最終的には、老夫婦は、見た目は若いのですけれども、やがて亡くなります。その後に、二つの神社に祭られ、片方の神社には松が、もう片方の神社には竹が生えます。いわゆる松竹の伝説なのです。この『鶴亀松竹』が、『にんらん国　下』にあったというわけです。こういう場合、書名だけでは判断できませんし、その他にも色々出てきているので、私もまだ研究の途中です。

六、その他の絵巻

また同じように、もう一つ伝本がほとんど伝わっていないものがございます。『ふねの始り絵巻』という作品ですけれども、題名からもしかしたらと思いましたが、残念なことにこれも詞書がありませんので、内容までは確実にはわかりません。しかし、絵から『舟のゐとく』という御伽草子、天理図書館に一つだけあるものと同じ話です。天理図書館の所蔵する奈良絵本・絵巻は、現在ほぼ全て閲覧できないのですが、以前に内容を紹介したものと照らし合わせると、間違いなく『舟のゐとく』の二つ目の伝本です。舟の由来、舟がどういうふうにできたかということを語る絵巻です。

それからもう一つ、慶應に関係するものとして、驚いたものがあります。それが、『牛若丸物語絵巻』です。絵巻物や奈良絵本が、どういうふうに出来たかということを、私は研究しています。この本は、先ほどとは違い詞書があるので、内容がわかります。これは簡単にいいますと、『天狗の内裏』という話です。『天狗の内裏』の絵巻物というのは、そんなに多くはありません。今度七月一日から、広島の海の見える杜美術館で展示を行いますけれども、そこが持っています。そこの絵巻は別の意味で面白いものです。義経が鞍馬寺で天狗から兵法を学んだ、ということですが、天狗とのやり取りの後、天狗に色々な世界に連れて行ってもらいます。たまたま、最近ボストン美術館の近くにあるハーバード大学の先生が研究室に来て下さったのですが、この話をしたところ、是非これは研究でとりあげたいと仰っていました、それくらい面白いのです。内容もさることながら、もっと面白いことがあります。

それは何かといいますと、筆跡が、私のよく言う朝倉重賢という人の筆跡なのです。上下巻の二巻本なのですが、それぞれの最後に印記が押してあります。しかも、絵の部分に印記が押されているのはとても少ないのです。いわゆる後

の所蔵者というのはこういうことはしません。絵の部分に印記を押せる人間というのは、非常に限られております。こちらの方に有名な反町茂雄の印記がありますが、彼ですら、絵の部分には押せません。

絵の部分に押してあるというのは珍しいのですけれども、おそらく、これは作った人間の印記だと考えています。なんと書いてあるかと言いますと、「小泉」「七左衛門尉・安信」です。小泉という人の印記なのです。

実は、慶應義塾大学が、これと全く同じ印記の絵巻を持っているのです。それが『ともなが』という作品なのですが、これも珍しい作品です。これに同じ印記があります。それともう一つ、いわき明星大学が持っている『貴船の本地』という絵巻にも、消されてはいますが、同じ印記があります。印記というのは、後の持ち主にとっては非常に目障りなので、一生懸命消した跡があります。

この『天狗の内裏』絵巻には、これらと同じ印記があり、それ以外にも、細かい部分まで、紙といい字といい、全く一緒なのです。また絵の雰囲気も、非常によく似ています。

そして、重要なのが、伝わった経路が別々なことです。もしも、同じところに伝わったのであれば、持ち主が印記を押した可能性もあります。しかし別々に伝わっているのに、同じような印記があるとしたら、これは作った人間の印記か、かなり早い段階の持ち主の印記かと考えられます。

こういう例は、「小泉」以外に、「城殿」という印記があります。これもおそらく作った人間が押したと考えられます（拙著『奈良絵本・絵巻の生成』、二〇〇三年八月、三弥井書店）。つまり、これらの印記から、絵巻物を作った人間の顔が見えるのです。しかも、この筆跡は、署名はありませんけれども、朝倉重賢のものだとわかります。そのため、朝倉重賢が、字のプロとして、「小泉」や「城殿」に一時的に雇われ、こういうものを書いたということがわかるのです。

と同時に、絵巻としての類似から、浅井了意という人も、これと同じようなことをしていたことがわかります。

七、おわりに

実は、絵巻物を作った人間というのは、面白い傾向がありまして、それは誰も言っていないことだと思います。絵でも詞書きでも、それを実際に作った人間のことを考えてください。浅井、朝倉という苗字の人間が詞書きを書いています。言うまでもなく、織田信長によって滅ぼされた一族の苗字です。また、岩佐又兵衛という人間が絵を描いています。岩佐又兵衛がどういう人かと言いますと、その父親は、荒木村重という、伊丹の有岡城にいた大名であった人間ですが、一時期信長を裏切ったのです。結局は、村重自体は逃げて殺されなかったけれど、一族は皆殺しにされてしまいました。村重の子供が岩佐又兵衛ですが、唯一、赤ん坊として助けられて殺されなかったのです。もう一人、海北友雪という、非常に豪華な絵巻を描いたといわれている人物がおります。この人も、浅井長政に仕えていた武将の子孫です。

このように、豪華な絵巻を作ったとされる人物達は、皆織田信長に滅ぼされた一族の流れをくんでいるのです。そういう方向に行かざるを得なかった、というところが面白いのです。こういった作者は、ほとんど名前がわからないわけですが、名前がわかっている者というと、皆信長に殺された一族か、その流れを組んでいるわけです。これはもちろん、余談であり、研究の対象ではありません。

ただ、今お話ししたような絵巻の紙が、非常に重要ということで、これを具体的にどういうふうに処理するのか。小泉という人間は、他の資料に、「絵草子屋小泉」とあります。「城殿」というのも絵草子屋、これは扇屋として有名です。それらの絵草子屋などが、絵巻物や奈良絵本を作っていた。一部知られていたこともありますが、やっと最近総合的に

わかってきました。ですから、まだまだ資料的に適宜補わなければならないと思います。

つい最近でも、奈良絵本の絵だけなのですが、何点か手に入れました。ご存知のように、これは『一寸法師』なのですが、実は、『一寸法師』の奈良絵本というのは、非常に珍しいのです。『一寸法師』は、御伽文庫、いわゆる御伽草子では非常に有名で、現在でも大変有名ですが、奈良絵本は無かったのです。それより前にあるのは、『小男の草子』という、成人した小さい男の話なのです。それが元となって、『一寸法師』が、おそらく江戸時代の初めにできました。ですから、奈良絵本というのはなかったのです。

それと一緒に、『ものぐさ太郎』の奈良絵本の絵も出てきました。これは、一枚だけですが『すみよし物語』です。この場合は奈良絵本の断簡ですが、このように、まだまだ大量に出てくるのです。まだ資料としては残されていて、しかも作られた数は相当な数です。絵だけだったり、一方では詞書だけだったりというのがいっぱいあるのですが、そういうものを徹底的に捜索すると、また新しいことがわかってくると思います。

付記　本稿は、二〇〇六年六月二四日に開催された、慶應義塾大学国文学研究会記念講演会において講演した内容を書き留めたものである。